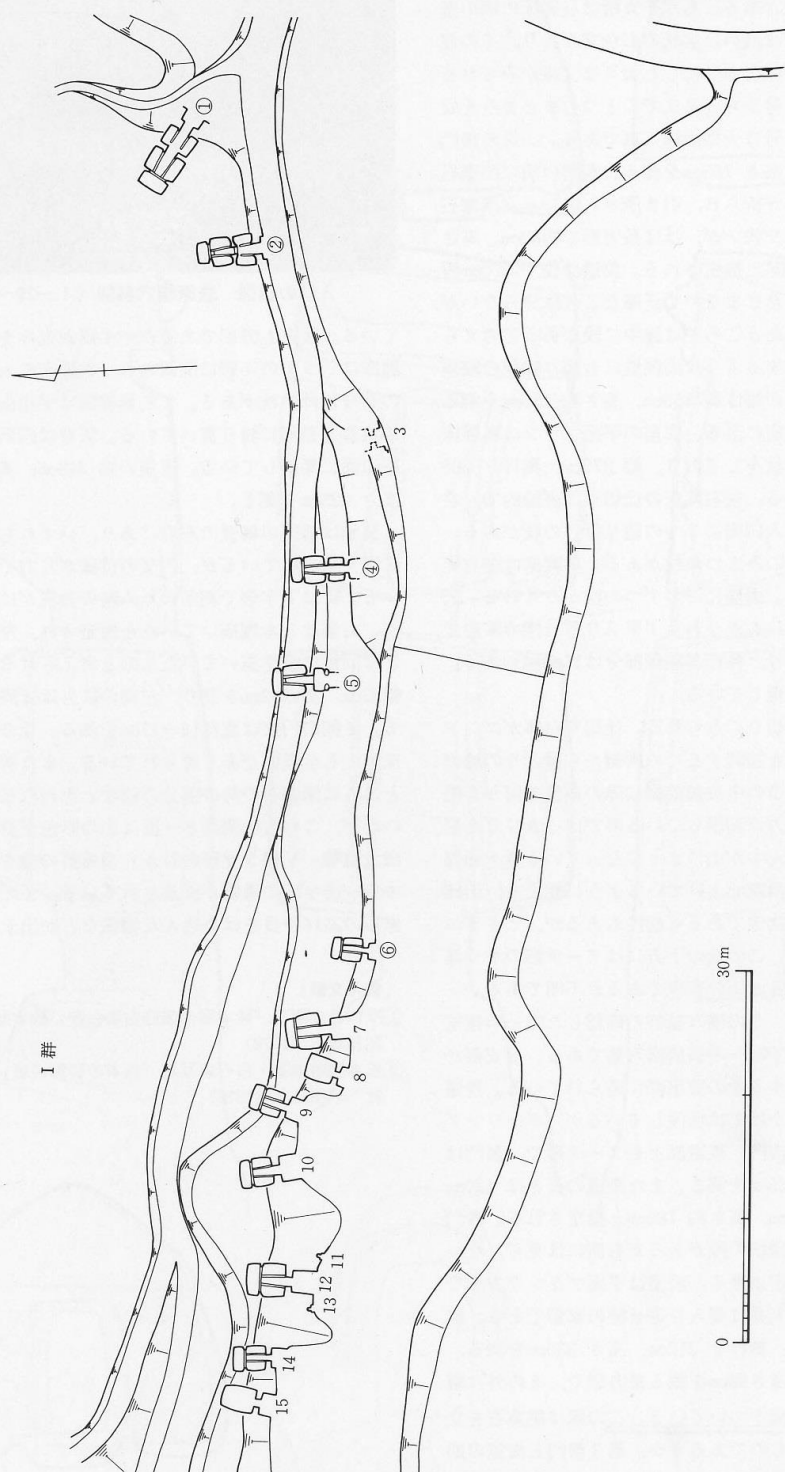
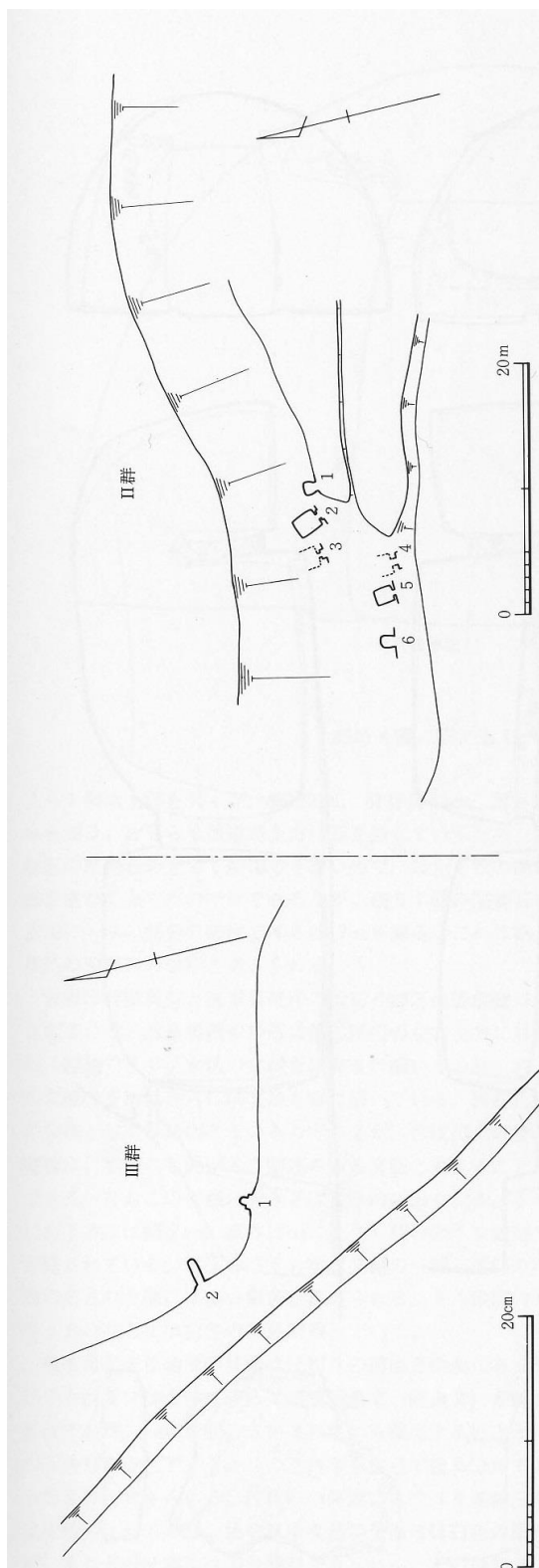


85. ^{さくらのうへ}桜ノ上横穴墓群〔昭和48年県史跡〕(81の1図, 85の1～8図)

——鹿本郡鹿央町岩原大野原・清水——



85の1図 桜ノ上横穴墓群配置図(1)



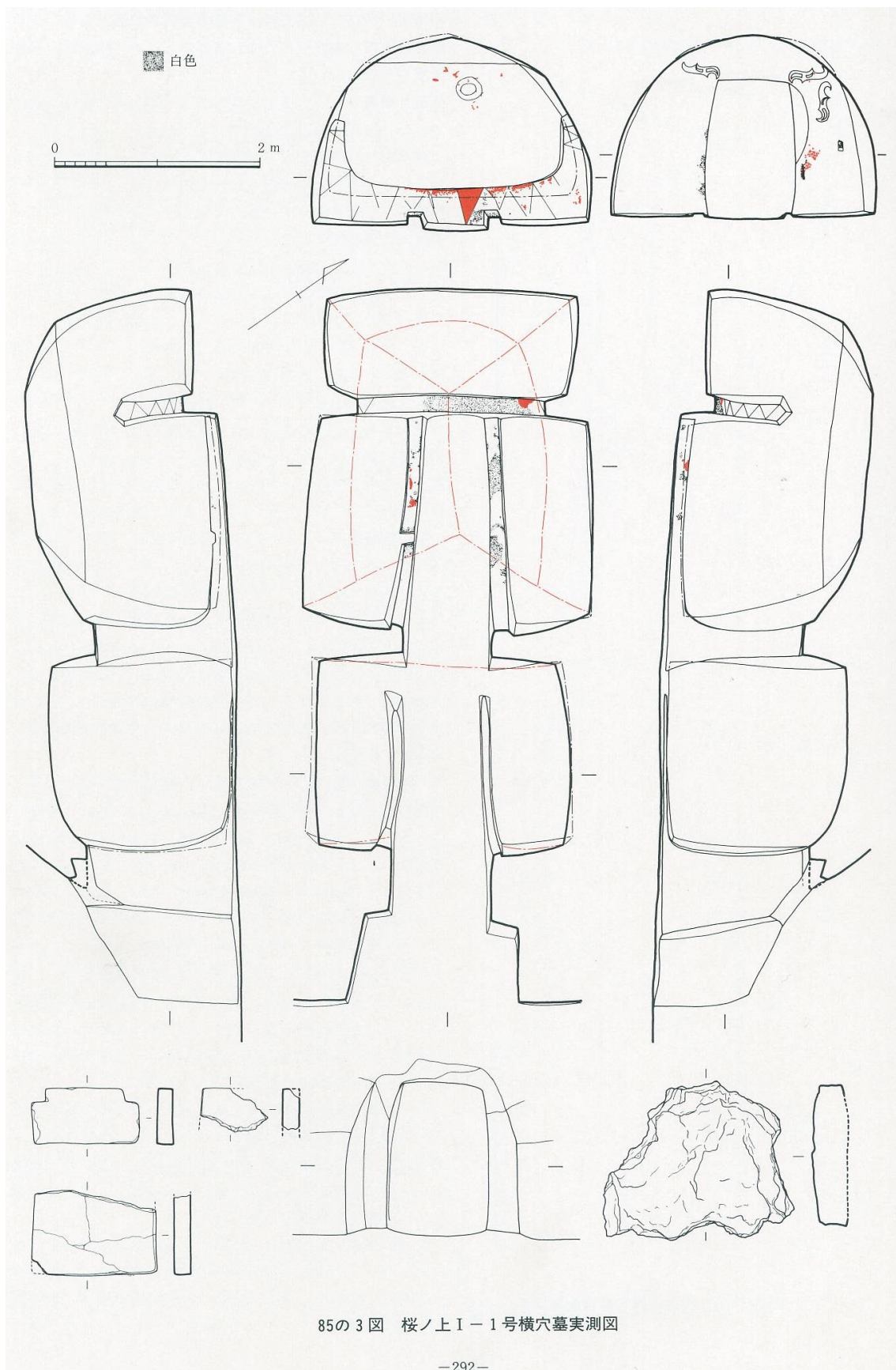
85の2図 桜ノ上横穴墓群配置図(2)

立地 菊池川の左岸、菊鹿盆地の西端にある志々岐台地が南東に伸びたところの南西面の凝灰岩斜面にある。近距離に岩原横穴墓群や長岩横穴墓群などがあり横穴墓の密集地域を形成している。

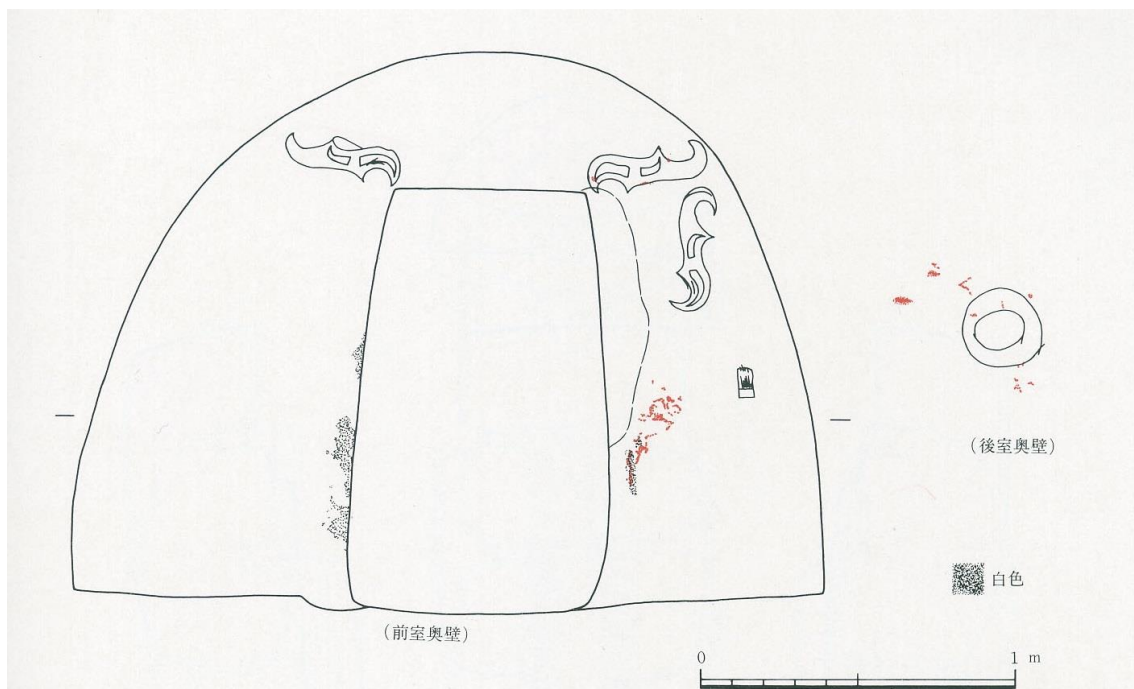
分布と概要 桜ノ上横穴墓群は385mの範囲に23基が確認された。大きくみると3群に分かれており、東から数えてⅠ群は107mの範囲に15基が並んでいる。Ⅰ群はさらに1号から5号までと6号から15号までに分かれ、埋没して不明である3号を除く1号から5号までは複室構造であり、玄室内に装飾文や彩色が認められる。5号と6号は20m程離れており、2～3基の横穴墓が埋没している可能性がある。6号から15号までは全て単室である。11号と13号は小型横穴墓で、12号のに付属したようにその左右に造られている。8号と15号の床は埋もれているが全て「コ」字形屍床と考えられる。天井は6号、7号、9号、12号、15号は妻入り寄せ棟の家形で、8号、10号、14号はカマボコ形である。なお6号から15号までの横穴墓のうち11号と13号の小型横穴墓を除く全ての羨門に赤の彩色が認められるが、風化のため文様であったかどうかは不明である。Ⅱ群はⅠ群の西方120mのところであり、現在6基確認できるが、さらに数基埋没しているものと考えられる。上下二段に3基ずつ、各々左あがりに並んでいる。1号は小型横穴墓で6号は未完成である。3号と4号は埋没しているが、2号と5号は家形の天井を確認できる。Ⅲ群はⅡ群の西方140m程のところであり、2基確認できる。1号は飾り縁をもち、内部は埋もれているが、奥行きがないので小型あるいは未完成と考えられる。2号も内部の床が埋まっているが羨門の幅約90cmで奥行き約2mを測り、玄室は羨門と同じ幅のまま奥に至っている。

Ⅰ-1号横穴墓 (旧1号横穴墓) 複室の横穴墓で、第一羨門の正面観は方形で幅98cm、高さ148cmを測る。羨門の前に落ちていた幅185cm、高さ153cm、厚さ約35cmを測る緑色片岩(?)の割石は元は羨道の上に架していたものと考えられる。羨門から80cm程で前室に至る。前室の平面プランは横長の長方形で、両側に仕切られた屍床を設けている。前室の幅260cm、奥行き190cmを測り、天井はカマボコ形で高さ180cmを測る。第二羨門も正面観は長方形で、幅88cm、高さ135cmを測る。第二羨門の前の部分は閉塞石を立てるため仕切りをカットしている。第二羨門から50cm程で後室に至る。後室は「コ」字形屍床で、奥屍床の仕切りはゴンドラ形に両側が上がっており端部は三角形に尖っている。右側の屍床の仕切りにだけ排水の溝が切られている。天井は妻入りの寄せ棟の家形造られている。後室の規模は幅280cm、奥行き333cm、高さ185cmを測る。羨門から奥壁まで690cmを測る壮大なもので、全面が研かれており、県内で最も整った横穴墓と考えられる。

閉塞石は第一羨門と第二羨門の2カ所に立てられていたと考えられ、3枚分の凝灰岩切石が残っている。1枚は完全な形で、幅104cm、高さ54cm、厚さ17cmを測り、上方両端に切れ込みがあるので、凸字形をしている。他の2個の



85の3図 桜ノ上I-1号横穴墓実測図



85の4図 桜ノ上I-1号横穴墓内壁装飾文実測図

うち1個は上部を欠くが、幅122cm、現存高83cm、厚さ17cmを測る。おそらく羨道の上に石を架しているため、一枚石の閉塞石を立てて開閉できないので、以上2枚の閉塞石を重ねて立てたのではなかろうか。残り1個の閉塞石は上端の一隅の部分の破片で厚さは17cmを測る。これは第二羨門の閉塞石の破片と考えられる。

装飾は前室奥壁と後室奥壁床の仕切り部と後室奥壁に施されている。前室奥壁の装飾は第二羨門の左右上方に対称的に線刻で「f」字状の文様を横向きに描いており、右上の文様の下にはさらに同文様を縦に描いている。装飾古墳の文様としては類例のないものであるが、古墳出土の甕の鏡板に「f」字状のものがあ関連のある文様と考えることができる。なおこの文様の大きさは長さ約40cmを測る。さらに右下方には幅5cm、高さ11cmに小さく靫のような線刻文が施されている。右上の「f」字状文様の一部と羨門の中程の高さの右側には赤い彩色が認められる。また羨門のやや下方の左右には白色の彩色が残っている。

後室奥壁床仕切りの装飾は仕切りの前面と側面にある。仕切り前面には全体に渡って連続三角文（鋸歯文）が線刻されており、一部に残っている彩色から復元すると上からの三角形を赤色で、下からの三角形を白色で塗り分けてあったものと考えられる。仕切りの側面にはやはり連続三角文が線刻されており、仕切り中央部の上面には白色の顔料が、またその一部には赤色顔料がみられる。その他左右の仕切りの上面や側面にも白色と赤色の顔料が認められる。

後室奥壁の装飾は上方の中央よりやや右寄りの位置に二重の円文がフリーハンドで線刻され、その周辺にわずかに

赤の彩色が認められる。外側の円文の径は約25cmを測る。

以下略

参考資料



f字状鏡板髹

中村双子塚古墳（山鹿市）出土馬形埴輪
山鹿市立博物館で展示中